



Tokyo Gakugei University Repository

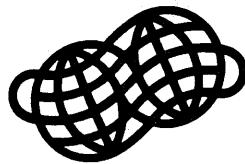
東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

|            |   |
|------------|---|
| Title      | 地理学研究者の論文生産年齢( fulltext )   |
| Author(s)  | 矢ヶ崎,典隆  |
| Citation   | 地理学評論, 78(8): i-iii   |
| Issue Date | 2005  |
| URL        | <a href="http://hdl.handle.net/2309/108986">http://hdl.handle.net/2309/108986</a> |
| Publisher  | 日本地理学会  |
| Rights     |   |

フォーラム：地理学研究者の論文生産年齢

矢ヶ崎典隆



日本地理学会

地理学評論 (第78巻第8号) 抜刷

## フォーラム

### 地理学研究者の論文生産年齢

矢ヶ崎典隆

『地理学評論』に論文を発表しているのはどのような世代の研究者なのだろうか。また、日本の地理学研究者は何歳ころに論文生産性が高いのだろうか。

1984年から2003年までの20年間に地理学評論に掲載された論文について、執筆者の年齢を学会名簿から判断した。学会名簿には生年のみ記載されているので、発行年から生年を単純に差し引いた数値をその論文の著者の年齢とした。連名論文の場合には筆頭著者で代表させた。分析の対象としたのは、論説、短報、総説、展望、特集号に掲載された日本語論文、および英文誌 (Series B および English Edition) の論文であり、会長講演、討論、資料、書評・紹介は除外した。対象論文数は983編で、学会名簿から年齢を把握できなかった37論文を除いて、946論文 (和文725論文、英文221論文) について分析した。

また、日米の地理学界を比較するために、*Annals of the Association of American Geographers* (以下、AAAGと略す) について同様の検討を行った。AAAGは、会員8,400人あまりを有するアメリカ地理学者協会が発行する権威のある地理学の総合的な学術雑誌であり、この点で日本地理学会の地理学評論に匹敵する。1984~2003年に刊行されたAAAGにArticleとして掲載された554論文のうち、学会名簿から執筆者の年齢を把握できなかった89論文を除いて、465論文を分析対象とした。

地理学評論では、946論文の執筆者の平均年齢は37.9歳であり、発行年ごとの平均年齢は34.0歳と44.0歳の間で推移する (図1)。論文の種類別に検討すると、和文論説の執筆者は若い。一方、英文誌の執筆者の平均年齢は高い。

分析対象946論文の執筆者を年齢別に示した (図2-a)。執筆者の年齢は24歳から77歳の範囲に分布するが、最も多くの論文を書いたのは27歳の執筆者であり、次いで29歳、28歳が多かった。20代の執筆者は946論文の28.6%を占める。30代は36.6%を占め、40代は18.4%、50代は10.1%、

60代は4.9%、70代は1.4%であった。20代と30代で65.2%を占め、若手への依存度が極端に高いことが明白である。特に、20代後半から30代前半にかけての研究者が高い論文生産性を示す。

論文の種類別に分析してみよう (図2-b~d)。論説の執筆者は非常に若い。27歳が論説執筆者のピークであり、24歳から33歳までの執筆者によって書かれた論説は288編で、論説全体の64.7%を占める。短報執筆者のピーク年齢は29歳であるが、論説に比べると20代から30代に分散している。特集号論文の場合、執筆者は20代から60代にかけて広域な分散傾向を示す。総説・展望論文についても同様の傾向がみられる。和文論文の全体の傾向としては、年齢分布は若手研究者への偏りを示している。

一方英文論文では、20代の執筆者は7.7%と低く、30代が38.0%、40代が29.0%を占める。30代と40代で67.0%を占めるが、50代は15.8%、60代は7.2%である。和文の論説を書いた60代の執筆者は5人であったが、英文論文の場合は16人であった。英文論文にはベテラン研究者の寄与が大きい。

以上から、地理学評論の場合、全体でみると20代後半から30代前半の若手の研究者が論文執筆の中心であること、特に彼らは論説の執筆に大きく貢献していること、一方、40代以上は特集号論文や英文論文の生産に貢献していることが理解できる。

AAAGの場合には、20年間における465論文の執筆者の平均年齢は42.6歳で、発行年ごとの平均年齢は39.0歳と45.7歳の間で推移する (図1)。AAAGの執筆者の平均年齢は、地理学評論の執筆者の平均年齢よりも4~5歳程度高齢である。年齢別にみると、AAAGでは35歳の執筆者が最も多くの論文を書いた (図2-e)。次いで40歳、33歳、38歳の順である。20代の執筆者の比率はわずかに2.2%であり、これは20代の執筆者が28.6%を占めた地理学評論とは対照的である。論文執筆の中心は30代で41.7%を占める。40代および50代の貢献も大きく、これらの年齢集団が総論文数に占める比率はそれぞれ34.4%と16.8%である。

AAAGの執筆者が地理学評論よりも高齢であることの要因として、アメリカ合衆国の大学が採用し

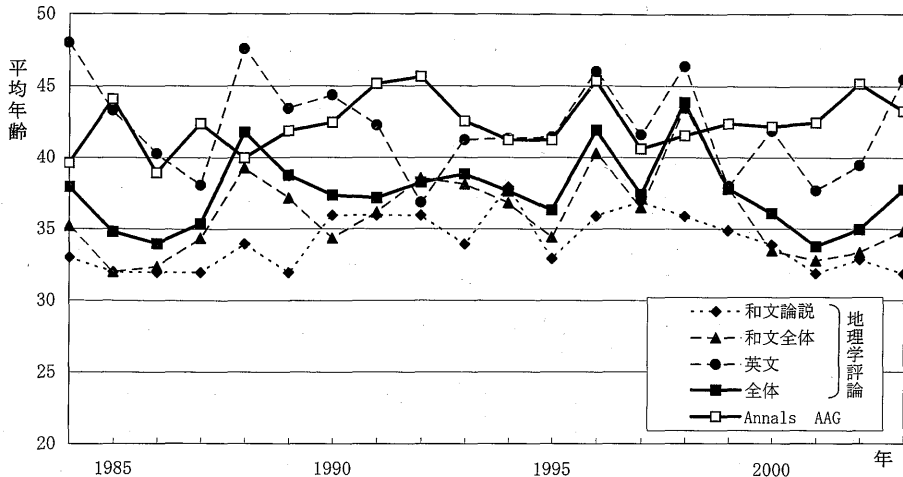


図1 地理学評論とAAAGにおける論文執筆者の平均年齢の推移(1984~2003年)

Fig. 1 Average age of contributors to the *Geographical Review of Japan* and the *Annals of the Association of American Geographers*, 1984-2003

ているテニユア（終身雇用）制度が挙げられる。アメリカ合衆国の大学院は教育を重視しており、大学院生が学術雑誌に論文を公表することは稀である。大学院修了（すなわちPh.D.取得）後にAssistant Professorとして大学に就職するが、この採用は任期付きの一時的なもので、若手研究者はこの期間にテニユアを獲得するために論文の生産に励む。テニユアを獲得すればAssociate Professorとなって終身雇用が保証され、その後の業績が評価されれば、年齢とは関係なくProfessorへと昇任する。テニユア制度のない日本では、採用時の業績審査が決定的な意味を持つため、大学院生は論文生産に励む。日本では大学院プログラム自体が教育よりも研究に重心を置いている。このような制度上の違いが、日米の論文生産年齢の差を生み出す一つの要因であると考えられる。

さらに、AAAGにおいて40代と50代の執筆者が51.2%を占めることは、ベテランの地理学研究者が継続して研究と発表に従事していることを示唆する。アメリカ合衆国の大学では、教育・研究分野と大学行政分野の専門分化が日本の大学よりも進んでおり、研究志向の教員が大学の管理・行政業務にそれほど煩わされることなく研究を継続できる環境が整っている。さらに、テニユアを獲得した後も定期的な業績評価が実施され、それが昇給に反映されるため、継続的な論文生産を促す圧力が強い。研究

に重点を置いた有名大学では特にそうである。しかも定年退職制度がないため、学術的な生産性を維持できなければ大学での居心地は悪くなり、身の振り方を自主的に判断せざるを得なくなる。ただし早期に退職しても、年金制度が老後の生活をかなり保障してくれる。

日本の大学ではテニユア制度も業績評価制度もないため、一部の任期付き雇用を除けば、いったん採用されると定年まで安泰である。このような終身雇用制度、年功序列に基づいた人事制度が、ベテラン研究者の論文生産性を低下させる一因なのかもしれない。就職するために20代後半に一生懸命論文を書くが、就職後も論文を生産し続けなければならないという組織的な圧力は存在しないのである。また、日本の大学のベテラン研究者には研究以外の仕事が多くあり、大学運営の仕事がのしかかってくる。社会的貢献を行うことへの圧力もますます高まっている。したがって研究のために十分な時間を確保することは至難の業である。しかも、ベテランの地理学研究者にとって研究成果を公表する場は地理学評論だけではなく、活動領域が広域化するにつれてさまざまなチャンスがあるのも事実である。

しかし、今回分析したように、日本を代表する地理学雑誌が、研究を始めて間もない20代の研究者によって支えられているというのは、果たして健全な地理学界の姿なのだろうか。私を含めて、50代、

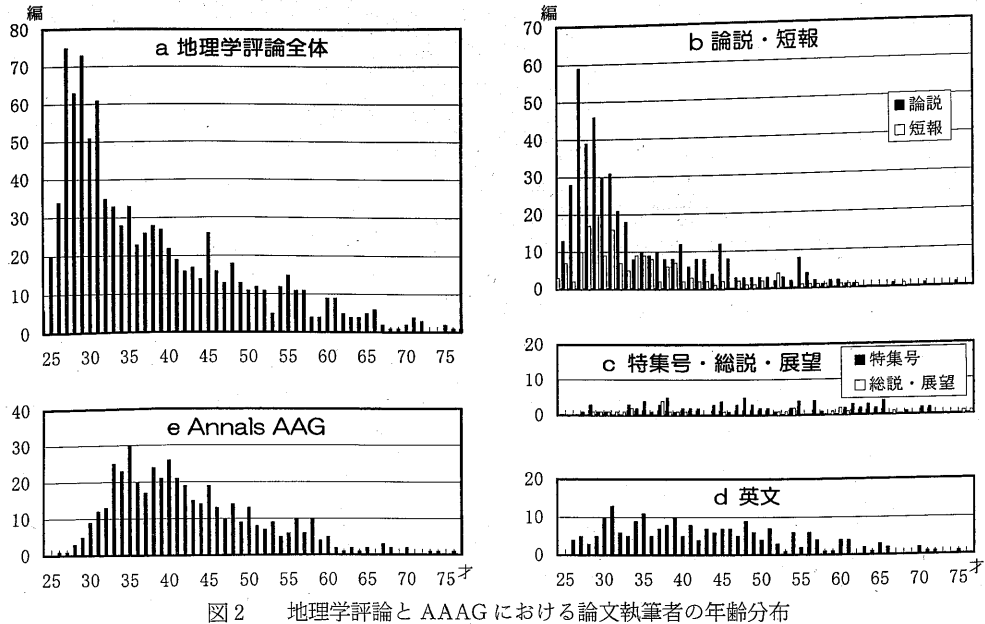


図2 地理学評論とAAAGにおける論文執筆者の年齢分布  
 Fig. 2 Age distribution of contributors to the *Geographical Review of Japan* and the *Annals of the Association of American Geographers*

60代の研究者がもっと積極的に地理学評論に取り組むべきではないだろうか。地理学評論は日本地理学会の顔であると同時に日本の地理学界の顔でもある。地理学以外の学術領域においても、また一般社会においても、地理学評論は地理学という学問を評価するための決定的な材料となる。ベテランの地理学研究者の取組みが地理学のバイタリティを生み出し、社会における地理学の認知度を高めることにつながるのではないだろうか。

なお、本稿を2004年度日本地理学会秋季学術大

会で発表した直後に、天野(2004)は『歴史地理学』を分析し、地理学評論とは異なった特徴を見出した。他の地理学雑誌も検討することによって、日本の地理学研究者の研究行動がさらに明らかになるであろう。

#### 文献

天野宏司 2004. 歴史地理学会における論文生産年齢について——2004年度日本地理学会秋季大会における矢ヶ崎報告に応じて. 歴史地理学 46(5): 15-24.